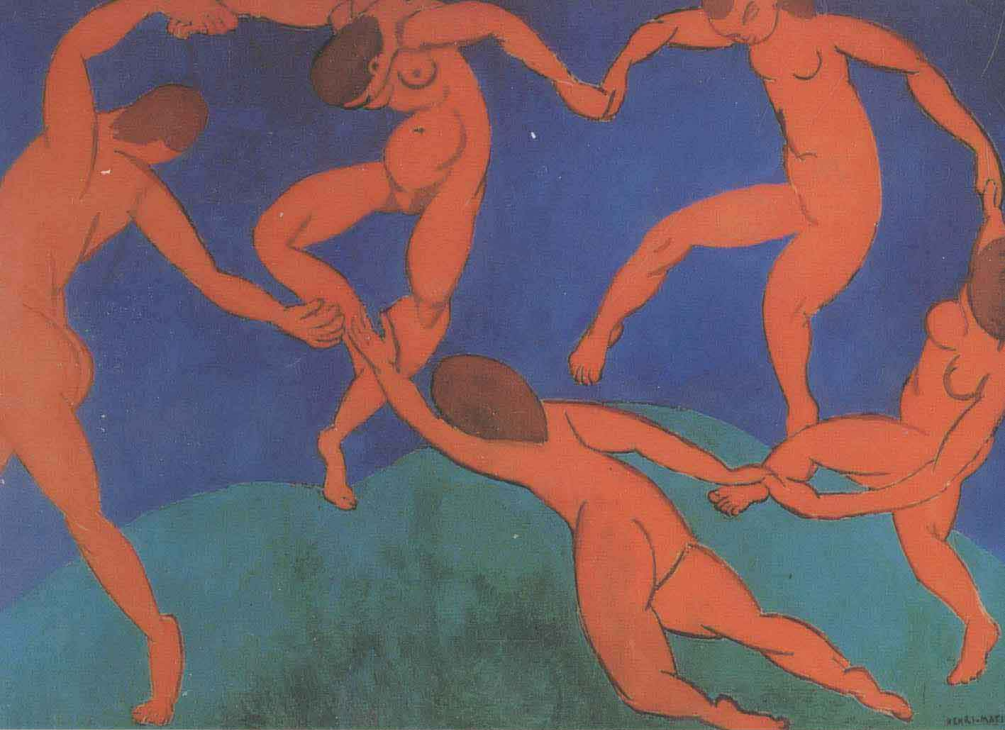




本をめぐる輪舞の果てに

2

アイリス・マードック

蛭川久康訳

みすず書房

アイリス・マードック

本をめぐる輪舞の果てに

2

蛭川久康訳

みすず書房

アイリス・マードック
本をめぐる輪舞の果てに 2
蛭川久康訳

発行者 小熊勇次
発行所 株式会社 みすず書房 〒113 東京都文京区本郷 3 丁目17-15
電話 3814-0131(営業) 3815-9181(本社) 振替 東京0-195132
本文印刷所 理想社
扉・表紙印刷所 栗田印刷
カバー印刷所 東京美術印刷社
製本所 鈴木製本所

©1992 in Japan by Misuzu Shobo
Printed in Japan
ISBN 4-622-04558-3
落丁・乱丁本はお取替えいたします

目次

第二部 冬の最中に(承前)

I

第三部 春

159

訳者解説

321

第二部 冬の最中に（承前）

ヴァイオレットは幾度もフラットを探して、ようやぐジェラードの部屋番号のボタンを押し、娘が気が狂っちゃって、どっかへ姿をくらましちゃったんです、と呼び出しホーンに向かって言った。一連の出来事というのは次のようなものだった。ギディオンにも話していた通り、ヴァイオレットはもうしばらく前からティマーが物を食べなくなったこと、憂慮すべき状態にあること、鬱病が進行しているのかもしれないということに気がついていた。母親としての感情はギディオンに言っていたほどには決して冷淡ではなく、確実にもっと複雑な思いだった。娘の不幸をみて喜んだ部分があったことは事実だった。それは娘の仕合せをみたらいい気がしない部分の裏返しだった。こういう考えには、ティマーが惨めになるのは正義にかなうこと、反対に陽気な明るいティマーをみるのは正義に反するという気持ちがあった。それにまた、ティマーが鬱病にはま

りこんで、ことによったら自殺に追いやられるかもしれないのを放っておいたのは、あんたの責任ではないかとギディオンに言われると知らんぷりをしているわけにはいかなかった。そういう非難は受けたくなかった。殺人者より犠牲者になった方がいいと思っていた。ティマーの苦しみをそれほど深刻だと信じられなかったのは、おそらくヴァイオレットの中にさらに別の部分があったからで、ティマーは自分の所有物、自分が腹を痛めて産んだ子、所詮わが娘ではないかという気持ちで働いていたからだ。誰だったか、例えばギディオンが、ヴァイオレットはみかけとは裏腹にほんとうはティマーを愛しているのだと言っていたが、それは一面の真実を伝えているといえただろう。事実、人並みの愛情は娘に持っていたし、そのためかえって深刻な事態になっているとは信じられず、じつは娘が人生のひとつの岐路にさしかかっているか、それとも一芝居打っているかのどちらかだと思ひ込んだのだ。

ティマーの傍目にもあきらかな心痛は、数日出かけて留守にするわ、と母親に告げたとき、ほとんどその

極に達していた。どこへ行くの？ 答えなかった。どうしてなの？ こんど会社が書店を訪れる観光客の実態調査をすることになって、それをわたしにやれというの、ホテルに泊ることになるけど同僚が手配してくれて、その人たちと一緒に、どこだか分かんないけどね。ええ、ホテル代は会社持ちなの。そのあと数日間家を留守にした。ヴァイオレットは信じる気になれず、試しにティマーが出かけたあと名前も告げず出版社に電話を試みた。ハーンショーさんは体調を崩して欠勤ですという返事だった。ヴァイオレットはよくよく考えた挙句、これは若い男との軋落ちだと決めた。そう思うとたまらなく不安になり、事実そう思うことだけで気が挫けそうだったが、娘はすぐ帰ってくる、相変らずしょんぼりと覇氣のないまま戻ってくると信じて自分を慰めた。娘の気が狂った、それも尋常の気の狂い方ではない、大狂乱だと確信したのは、ティマーが帰ってきたあとのことだった。

午後家へ戻ってきたティマーは母に口もきかず、きかれても答えず、母親の顔さえ見なかった。真直ぐ寝室へ行き、外套と靴を脱ぐと、ベッドに横になり、い

つはてるともなく泣き呻き、ぶつぶつ文句を言い、さかんに体を反転させては小さくヒステリーの叫び声をあげた。ヴァイオレットがコーヒーとサンドイッチを持っていくと、ものすごい勢いではねのけ、すべてが床の上へ飛び散った。はてはシーツを引き裂いて口の中に詰め込み、そのまま夜になるまで絶叫し呻きちらしながら横になっていた。そして朝になってヴァイオレット（疲れてようやくとうとうと眠った）が目覚めてみると、ティマーはまだ泣き叫んでいた。その凄まじい慟哭はまるで気が狂ったかと思わせるに十分で、これほどの烈しい声をこれほど続けざまに発するのは発狂した動物以外に考えられなかった。世の中には正気の沙汰でないということが存在するが、これがそうなのだとヴァイオレットに思わせた。医者に電話をかけに外に出た。そして戻ってきたとき、もうティマーの姿はなかった。

ジェラードの電話番号をダイヤルしても応答はなかった。ジェラードは大英博物館へ出かけていたし、ギデオンは新規開店の画廊にいたし、パトリシアはハロッズのセールへエジプト製の木綿のシーツを買い

に出ていた。それでヴァイオレットはローズに電話した。居合せたローズは事態のただならぬことを察して驚いた。いいえ、わたしと一緒にありません、どこにいても全然見当が付きません。ローズは、ヴァイオレットが公衆電話からかけているのを知って、わたしが方々電話をかけて捜してあげます、家へ帰って心配しないで待っていてください、きつとじきに帰ってきますよ、と言った。ローズはジュンキンに電話した。当然のことながら、やはりジュンキンも狼狽したが、姿をくらました子がどこにいるかは知らなかった。そうだね、今のところ警察に知らせることもないと思う。ローズはなにか分かったら、また電話すると言った。それからダンカンに電話をした。とまどい驚いた様子だったが、やはりなんの手掛りもえられなかった。彼はローズにティマーが現れたときには、必ず知らせて欲しい、きつとヴァイオレットはいつものようにとんでもない空想に走り、物事を筋道立てて考えられなくなっているだろうと言った。そのあとローズはジュラードに電話をしたが、無駄だった。それからガリヴァーのフラットにも電話してみたが、仕事を探し

て外出中だった。そのあとローズはリリーに電話した。リリーは電話口に出ると、ちょっと切らないで言っただけ、声をひそめて、ええ、わたしの所にいるわ、なんの心配もいらないわよ、でもお願いだから誰も寄こさないでねと念を押すと、不意に電話を切った。ローズはジュンキンとダンカンに電話をした。ジュンキンはタクシーでヴァイオレットの所に行つて、ティマーは心配ないと伝えようと言った。わたしはリリーの所へ行つてみるわ、とローズは答えた。

ローズはリリーのベルを押し、名前を告げた。少し間をおいてリリーが玄関まで下りてきて、ドアをわずかに開けて、敵意のこもった様子で「なんのご用？」と訊いた。ローズの懸命な質問に、ティマーは大丈夫よ、病気じゃないから、今休んでいるわ、お願いだから二人だけにしておいてくれない、ごめんさいねと答えた。ドアが閉つて、ローズは不安と狼狽のうちに家へ戻つて、ジュラードに電話してみたが、まだ留守だった。

もちろんティマーは「大丈夫」どころではなく、狂気同然といえた。手術が終って、迷惑な胎児はもう存在しなかった。しかし、リリーが予言してくれた安堵と解放感は訪れなかった。ティマーは夢遊病者のようにうつろな目付きで人造人間の足どりで医院に入った。そしてはりつめた意識で、苦悶と責苦のむきだしの意識で医院を出た。そのとき、どう転んでも完全に手遅れというそのとき、ダンカンに対して、自分に対して、故意に息の根を止められた無力な一人前の人間の形をした立派に存在する人間に対して重大な罪を犯したことが理解できた。苦々しい後悔と嘘言の生涯へわれとわが身を追いやったのだ。あの失われた子をこれから先、時の果てるまで毎日毎時思い出せと宣告されたのだ。あの子供、あのかけがえのない大切な殺されてしまった子供は、およそ今後自分がこの世で描きうるどんな情景にもその一部として登場するだろう、自分はこのおぞましい秘密を永久に年とるまで抱きかかえていかなくってはならないだろう。自分は悲嘆の病いで死ぬことだろう。どうしてこんなことをしてしまったのだろう、どうして早まってこんな行為に走ったのだらう、

う？　ことの恐ろしさも予見できず、まるで大きな安堵が前方に待ち受けていてくれるかのように、ひたすらことが終るのを願ったりしたのだろう。ボーアーズであのとき不吉な予兆かなと思いつながら見た川の中の溺れた猫と同様に今はあの子は息絶え、知覚を失い、押し流されてしまった。医院で叫び声ではなく泣き声のティマーに睡眠薬が与えられ、眠りながらひとりの子の夢をみた。それはすべての憩いを悪夢にかえてやまない陰險な復讐の告発者としてこれからのどんな夢にも現れるだろう。もはや眠りは呪われた妄想という恐ろしい束の間の時間以外にはありえないように思われた。夜間目が覚めて、子供の泣き声を聞いたと思ったり、良心の呵責に苦しみ、手足をがんじがらめにされた人間のようにじたばた寝返りをくりかえした。牧師はあなたは喪中なんですと言ったが——その通り、言われるまでもなく、闇に葬ろうとした幼児のためにすでに喪に服していた。

ティマーは母親を見ると、嫌悪の情にみたされた。母は自分を殺したかったのだ。自分がこの世に生れてきてしまったのは、母が思い止まってくれたからでは

ない、お金がなかったからだ。もしあの時リリーさえいなければ、金を持ち、世間知にたけ、いかにもその気にさせるでたらめな慰めを言うリリーがいなければ、もっとゆつくりあの行為について考える余裕があったはず。当然もっと先のことであるはずのことがいともあっさり過去のことになってしまふなんて。ティマーはリリーを呪い、自分をダンカンの所へまるで屠殺所に向う仔羊のように使いに出したジェラードを呪った。安易にわたしを使いに出し、ただ自己の目的のためにわたしを利用し、犠牲にして、自己の良心を満足させ、力をひけらかして、わたしを取り返しのつかぬ危険に投げこんだジェラードを。ローズもジェンキンも憎らしかった、ゆうゆう落ち着きはらっている「善意の連中」の胸糞がわるい企みがなにもかも憎らしかった。なにも見えず分かりもしないくせに、自己満足の香氣を吸って呑気に生涯を笑って過す連中が憎らしかった。一瞬の出来心にも等しい慰めのために、けちな安易なセックスのために、不用意、気紛れにわたしの一生を生きながらの死にしてしまうような恐るべきウィルスを感染させたダンカンが憎らしかった。わたしの青春

は暗黒と化し、呪い倒されただけでなく、終つてしまつたのだ。これからは顔に皺が寄り、四肢が痛んで硬直し、びっこをひき、猫背になり、老人となる、ダンカンからうつされた病いのなんと凄まじいことか、それでもダンカンを増えなかった、愛していた——そのことが今の苦渋をいつそう捻じれたものにした。そしてほんの少し前ダンカンにあれば嬉々として甘美な思いのうちに恋を感じ、永久の秘事となるはずの無私の愛を感じたときに経験した、あの純で気高い苦しみの充実感をふたたび驚くほど鮮明に思い出すのだった。もう一度あの痛みに、あの苦しみに、あのひそやかな思いに立ち帰れたらどんなにいいだろう。その痛みは歎びであり、その思いは天国であるのだから。それが今ティマーを蝕み食いものにしようとしていた。ティマーは暗黒の重荷に耐えかねるように呻きながら屈みこんでしまふだろう。そう、すぐにも死ななければならぬだろう、どんな生き物もこの痛みでは生き続けられない、餓死するか、それとも空になった胎内に命を奪う癌を宿らせるかのどちらかだろう。

ティマーは相談相手にリリーを選んだことが今回こ

の道を選ぶことになったのだということを百も承知していた。リリーの話は聞いてみたかったし、しかもリリーのいかにもリリーらしいまるであの行為なんかなんでもない分かりきったこと、これだって避妊の一つの方法、「誰にもよくあること」のように、屈託のない明るい世慣れた調子で聞けたことはまさに願ったり叶ったりだった。でたらめな話について思考力が鈍化し麻痺し、あの時のジレンマの苦しさ、決断のつきかねる苦しさに立ち打ちできず、じつくり待って、考えるだけの勇氣もないまま、ダンカンの子を、唯一無二の子を、彼が念願しつづけた子を闇に葬ってしまったのだ。あれはダンカンのため、ジーンのため、救いのない呪われた結婚のためにやったこと、今やティマーにとってなんの意味もなくなったローズやジェラードなどの人々の視線にさらされ屈辱を受けないためにやったこと、結局は犠牲の行為のはずだった。今はあの奇蹟の子が存在したことが、神の祝福、神からの賜物に等しいあの子が存在したということそのものが、ダンカンにとって、ティマー自身にとって、ひょっとしたらジーンにとっても、いっそう重要なかけがえの

ない生命の源、生命の救いであるのではないかと思われた。ただしジーンはどうでもよかった、やはり憎んでいた。もしかしたらわたしはこの嵐を楽々としのぐことができたかもしれないのに、とティマーは考えた。母と子が勇ましい目付きで波の上に駆り出していく姿が目に見えるようだった。二人は仕合せな自由な善い生活を始める、そして最後にすべての人に助けられ、親切を受けたかもしれないのに。しかし、その子は死んでしまった、それとももっと怖ろしいことに、その子は腹黒い悪意にみちた憤懣と憤怒の陰險なデーモンに変身して、凶行に及んだこの母を、あとからこの呪われた子宮から生れてくるかもしれないすべての子供にとって死を意味するこの母をひたすら罰する、恐ろしい醜惡な亡霊として生き続けるのだろうか。母に對するこの憎しみと呪いの生々しい現実感はずいぶん後の生活にとってなによりも耐えがたい恐怖だった。そんな将来が行く手にずっと広がっているのがよく分かった。善い子、真実の子を殺害し、代りに悪意にみちた邪劍な存在を作り出したのだ。しかもそれはこのわたし自身の邪念から生れ、わたし自身の黒々と

した血を滋養にして生き続ける嫉妬深い殺人鬼なのだ。この邪悪の子がこれから生れてくるわたしの子供らを殺すのだろうか、生かしておいてはくれないのだろうか、それとももっと残忍な仕打ちで疫病とか奇形とか狂気などによって子供らを廃人同然に追いやるのだろうか、と考えた。同時に自分もう長くは生きられないという気がした。それは理性とか愛の領域を越えて、あたかも煉瓦を積み上げた独房の中で身近にしかしゅっくり迫る責苦をともなうたしかな死に身を委ねたかのように、暗闇と孤独に閉ざされた思いだった。

ティマーは顔を隠したまま、ソファアーにしばらくの間静かに横になっていた。リリーがテーブルで一人トランプをやっている、その振りをしているのかもしれないなかった。ふたたびティマーは静かな呻き声を出しはじめ、「おお、おお、おお」とくりかえし口走った。それから全身を痙攣させながら絶叫すると、うつ伏せになり、クッションを引きちぎり、口の中へ押しこんだ。リリーはティマーの様子に戦慄し驚愕した、こん

な悲痛のさまを目撃したのははじめてだった、どうしていいか分からなかった。いつそあの惨めったらしい秘密なんか打ち明けられない方がよかった、悪夢に変わろうとしているこの出来事に関わったのはなんと浅はかなことだったのかと思った。今となれば、なにもティマーをせきたてて結果がどうなるかも分からぬ決断に追いやれることもなかったのだ、そんなことは分かっていたはずなのに。自分としてはティマーが聞きたがっていると思われることを言っただけ、ティマーがして欲しいと望んでいるらしいことをしただけなのに。

それが今、自分までもなにやら恐ろしい、もしかしたらとてつもない悪事に荷担したみたいだった。むろん、誰に知られてもまずい、ティマーが訪ねてきてから、何度となくこのことはおくびにも出さない、臭わすことも決してしないから、あなたの秘密はわたしに任しておいてなどくりかえし念を押したのだった。しかし、ティマー自身の半狂乱の恐ろしい、もしかしたら死につながる病いにとりつかれたこの様子は隠すことができないだろう。ティマーは正気を取り戻す気配もなく、リリーがお医者を呼んでこないといけない

わなどと言うと、ティマーはよけい悲鳴をあげる始末だった。あの人達に助けを求めるのも同じようにあるいはそれ以上にできない相談だった。頼りになる人、助言や助けを求めることのできる人は誰もいなかった。ジェンキンからティマーがリリーの所にいると知らされて電話してきたガルにだって、いいかげんな話でごまかさなければならなかった。ローズにはもっとなに食わぬ調子で対応をしておけばよかったと今思うが、嘘をつくことはできなかった。それにヴァイオレットにはティマーが「心配ない」ことを伝えなければならなかった。あの人達はだれもかれもじつに要領よくただ遠巻きにしているだけ！ ああ神様、お医者に来てもらわなくては、リリーはそう考えた。なにか助けがどうしても欲しい、ひとりでなにかも責任なんかとれない、ああ、わたしの罪だ、わたしが悪い、あの子が来たときは喜んだし、助けてやれると思うと得意だった。あの人達にはなく、わたしに秘密を打ち明けてくれたのだと思えば嬉しかった。ああ、なんでこないまいましたに首をつっこんでしまったのかしら、これから先どうなるのかしら！

リリーの後悔の念は、ティマーが呻きと呻きの合間に浴びせてくる復讐心まるだしの非難にますます重く彼女にのしかかった。

「なんであの場所へわたしをさしむけたの？ なんでもたわたしに待たせてくれなかったの？ ただ人をせかせることばかり言って、なんの造作もないように思わせて、あとはすごい気分だって言ったでしょ、もう一日でも二日でも待っていたら感じ方もちがっていたわ、あのことの意味だって考えられたのに、それをやたらとせかせて、思いきらなきや駄目みたいに言ったでしょ。もう人生めちゃくちゃだわ、なにかも駄目、みんなあんたの責任ね——」

「眠れない、どうしても眠れない」クリモンドが言った。ジーンは途方に暮れていた。涙がこぼれた、死の涙が、人生を思い、もう無縁になったとしか思えない人生の幸福を思い、涙がこぼれた。

クリモンドはそんな涙にいつこうお構いなしで、もう独言を言っているようにみうけられた。

さっきまでクリモンドはジーンのために詩を読んでいた。聞かせていた。ギリシャ語の詩で、彼女に理解できないことも気づいていない風だった。前にも時折ギリシャ語を読んでやったことはあるが、一回の分量はわずかで、翻訳してくれるのだった。今日は違っていた、ひとりでどんだん先を続け、まるで聖餐式か悪魔払いの儀式のようだった。

ジーンはまさか本が出来上るとは思っていなかった、これからも長い間、おそらく幾年もの間生活をともにする相手と考えていた。ジーンはクリモンドの謎の一部としてこの相手に慣れ、歓迎し、愛した。クリモンドから「書き上げたよ」と突然言われたとき、彼女は完全に不意打ちを喰らった。そのときはさして深刻に受け取らなかったけれど、彼が言った破滅的な

ことばを思い出した。心配になった、この先本を仕上げる目標がなくなつて生きていけるのかしら、クリモンドは？ これからどうするのかしら？ なにかしら決定的な変化でも起つたのかしら？ もちろん、あとから思いついた事柄だつてあるだろう、補遺を執筆することだつて考えるだろうし、おそらく落ち着くまでには長い時間がかかるだろう。クリモンドがいかに仕合せそうにしているのを見て、ジーンはしばらくの間ほつとした気持ちだった。クリモンドは、突然執筆完了の宣言をしたら、ジェラードと彼の仲間はぐうの音も出なかつたよ、と冗談めかして彼女に話した。結局あの仲間に話したのは、ほんの僅かの時間的な差だつたけれど、ジーンより先になつてしまった。ジーンはそんなことはどうでもよかった。一日二日、クリモンドは朗らかで、あらためて静かな「休日を楽しむ感じ」があつた。ジーンはここぞとばかり二人の孤立した生活の中にそれまで仕方なくタブーにしてきたあらゆる人並みの幸福をつくづくと思ひ、晴れ晴れとした気分でその思いをかみしめるのだった。そして思うだけでなく、口にさえ出して言った（彼は反対

しなかった)、「出かけましようよ、ねえ。ひと休みしなくちゃ、ローマとかベニスへ行きましよう。どこか素敵な所を見物しない、あなた、二人で逃げ出しましょう。きつとすばらしいわ、ね、そうしましょ！」

クリモンドは駄目だとは言わなかった、黙っていたが、あとになって思うと、どうやら彼の耳に聞えていたわけでも、じつと耳を傾けていたわけでもなく、最初はある意表をついた得体の知れぬ不気味な陽気の中で、今は不安な絶望的気分の中で、自分ひとりの思いに浸りきっていたのかもしれない。

原稿は書斎になかった。クリモンドの大きなジャージーの上着やペン、インク、いくつものコップ、仕事の中膝にかけていたショールなどすべてが机と椅子にいつもの通り置かれていた。しかし電気スタンドのスイッチは切られ、日に焼けた原稿の大学ノートの山は全体をコピーにとり、それからタイプを打つためクリモンドの選んだタイプ印刷所へ運ばれていった。クリモンドはこうした段取りに多少の危惧をもったが、いよいよ原稿がいくつもの箱に詰められて階段を上がり、貨物自動車に積みこまれたときも別に不安を示す風も

なかった。それから机に向うことはなく、二階の表部屋のテーブルで読書をしたり、手紙の整理などをしていた。遊戲室の戸棚の片付け、大量の下書き原稿の焼却、三挺の銃と二挺の回転銃とピストルを持ち出して手入れをしたりした。これ以外にも銃のコレクションはあったが、とうに売り払ってしまった、これも売ってしまうつもりだ、とジーンに話した。ジーンはもし本気ならば、それだけでも好転の兆しだと思い、「新世界」の訪れを画することとして大いに期待を寄せた。最初の幾日か不安な気持ちでクリモンドを見守っていたが、静かに本を読み、静かに話をする様子を見るのは嬉しかった。ジーンは本について質問し、やっぱり書き上げるつもりだったのね、タイプ原稿はまだいろいろ手を入れる必要があるんでしょ、などと尋ねた。クリモンドは笑いながらあいまいな返答をした。時には話し相手になって欲しいとせがんたり、買物と一緒に出かけることもあった。彼女が自動車でどこかへ行きましよう、どこだっていいわ、自動車も動かさないといけないから、どうします、と誘ったりすると、そうだね、いいだろう、悪くないと言った。

そのあとだった、彼は自暴自棄の気分になれ、死を口にするようになった。

夜、眠れぬまま、クリモンドはジーンズの眠りも邪魔し、セックスを求めるでもなく、ただ体をきつくきつく抱きしめ、まるで彼の全身が彼女の全身を生きた滋養にしているようだった。ジーンは彼の愛と自分の愛の両方の愛の強さにほとほと疲れ果て、怯え、擦りきれ、時にはそれが決定的とも思われ、気がつくともわけもわからずこれでわたしたちはおしまいだ、と考えることがあった。どういう結末になるのだろうか？

二人の状況はなにかしら大きな不仕合せに向って先を急いでいるように思われた。そのくせ別な時クリモンドがはしゃいだ気分に促われれば、ジーンには絶望感などすでに過去のものになろうとしている、止むをえない一局面だったのだという気もした。前の晩は二人とも抱き合ったまま少し眠れた。

「眠れたでしょ、どう？」

「ああ、そうだね——」

朝の光が食事をしている狭い台所に射しこんでいる。ふだんからこまめに掃除をしているせいでよく整理さ

れた清潔な台所は、自分にも人並みの生活があるのだという実感をジーンに持たせてくれた。これで自分の方が気が狂いそうになるクリモンドの常軌を逸したことを止めさせることができればいいのだが。

「トーストを少し食べない？」

「いらない、コーヒーだけでいい」

「だんだん食が細るじゃない」

クリモンドはなにも言わないで、じっとジーンを見つめていた。落ち着いた顔付だが、青い目がやたらに大きく丸く見開かれていた。

「ねえ、あなた、きつと今晚はもっとよく眠れてよ。眠らなくちゃね。睡眠不足がたたっているのよ。あなたをしっかりと握まえて、ついていてあげるわ。命をあげてもいい——」

「死が怖ろしいのは理屈じゃない」クリモンドが言った。「どじだけは踏みたくないんだ」

「もうその話はよして」

「銃で自殺するっていったって、そう生易しいことではない、人間なんて目が見えなくなっても、知恵がなくなっても、生きつづけていることに気がつくこと